



善光寺さん。

[1st.] ASTRONOMY

神秘の名刹 信州信濃の善光寺



冬至の日の朝日は向かって左側の「阿形」の顔を、夕日は右側の「吽形」の顔を照らし出します。その前後数日も胸、肩のあたりに日が当たる様子が見られます。

謎・不思議から探る いにしえ人の技と英知

信州の人々が親しみと敬意を込めて「善光寺さん」と呼ぶ名刹・善光寺。数々の記録から7世紀には広く全国に知られる存在だったことがわかっていきます。本堂をはじめとする現在の諸堂は18世紀に再建されたもの。御本尊は、これまで誰も姿を目にしたことのない絶対秘仏です。聖徳太子と書簡を交わしたと伝えられるなど霊仏として尊ばれ、戦国時代には武田信玄、上杉謙信、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康といった武将達が奪い合った末、信州善光寺に戻るといふ数奇な運命をたどりました。今年はその秘仏に代わり同じ姿の「前立本尊」を公開する、数え年で7年1度の「善光寺御開帳」の年にあたります。

秘仏の来歴もさることながら、善光寺にまつわる伝説や言い伝えには謎や不思議が多く、今なお新たな発見に胸ときめかせて参拝に訪れる人も多いためです。その一人が、長野市伝説環境保存審議委員会の会長を務めている相原文哉さんです。

工業高校の建築教諭だった相原さんは、信州各地の歴史ある社寺を訪ね歩き、その建築に秘められた謎や不思議を読み解くことをライフワークにしてきました。

善光寺で相原さんをハッとさせたのは、二度の消失を経て大正時代に再建された仁王門の仁王像「阿形」と「吽形」の配置が一般的な仁王門と逆だということでした。左に阿形、右に吽形がある仁王門は、相原さんが調べたところ、全国でもわずか4件。善光寺の仁王像は高村光雲と、その弟子の米原雲海のコラボです。仏像彫刻で既に名をはせていた両名が単純な間違いをするとは考

えられませんか。顔の向きや姿勢を見ても、最初からこの配置が想定されていたのは明らかです。「何か意図があったに違いない」と、相原さんは考えました。通路側を板壁で覆っていない門の構造や像の向き、地形、周囲の環境などから、棟梁や仏師の意図を探り続け、相原さんが打ち立てたのは、「1年に1日だけ、冬至の日の出の日射が阿形像の顔を照らし、日没直前の夕日は吽形像の顔を当てる」という驚くべき仮説でした。

「冬至は農耕にとって新年の始まりの日ともいえる非常に大切な節目です。この日のエネルギーに満ちた朝日が、密教の思想で物事の始まりを象徴する阿形の顔に当たることは大変意味深いこと」と、相原さん。仁王像の配置が天文学(アストロノミー)の知識をもとになされたという仮説は1999年の冬至に、ローカル新聞の呼びかけで集まった人々が見守る中、確認されました。

昨年の冬至は雲に阻まれ、神秘の瞬間をとらえることはできませんでした。しかし、この日は新月と冬至が重なる19年に1度の「朔旦冬至」。御開帳の年を迎えるにふさわしい吉日となりました。善光寺参拝の折、これまでとは少し違った視点で境内や門前を見渡せば、まだ誰も気がついていない、先人がひそかに残した技や英知の痕跡に出会えるかもしれません。



冬至の日射と仁王門の謎を語る
相原文哉さん
(2014年12月22日早朝)

善光寺の謎と神秘

善光寺の名は、信濃の人「本田善光」が、難波の堀江(関西にあったとされます)に投げ込まれていた阿弥陀如来像に名を呼ばれ、背に負って信濃へ戻って寺を創建したことに由来します。この仏が善光寺仏で、自らの託宣によって「絶対秘仏」となりました。古い書物や絵巻でこのように伝えられる善光寺の由緒は、創建から謎に満ちています。都から遠く離れた信州信濃という鄙(ひな)の地にありながら、古代から現代まで時代を越えて善光寺が全国的な信仰を集めてきたのは、その神秘の中に人知のおよばぬ救いの力を求めたからかもしれません。

山門の彫刻に不思議の獣?

社寺では麒麟、鳳凰、獅子など、想像上の霊獣をかたどったさまざまな彫刻を見ることができます。善光寺も例外ではありません。なかでも山門は霊獣の宝庫。阿吽の犀、3本足の鴉、獺などが配置されています。本堂側の欄間外側に2頭見えるのが、全国的にも珍しい「角端」。角を持つ獅子の頭の獣で、炎をまとい、1日に18000里を駆けるといわれます。相原さんによると「山門の角端は実に珍しい例」。新たな研究テーマとして注目しているそうです。

石畳は7,777枚、「7」の神秘?

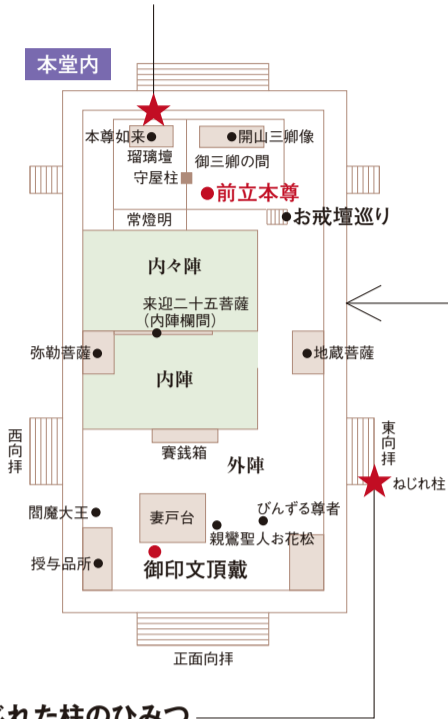
善光寺境内入口から山門下の約400mに敷かれている石畳は江戸の豪商・大竹屋平兵衛が寄進したものです。我が子を盗人と誤って殺害してしまったのを悔いて巡礼に出、善光寺参拝者のために石畳を寄進する善行で息子を供養しました。その数は7,777枚と伝えられます。「7」という数字はいたるところにみられ、善光寺本堂内陣の「お戒壇」へ向かう階段は7段、善光寺とゆかりのある7寺院、善光寺を守護する7神社、江戸の善光寺みやげ7名物など、さまざまな7が語り継がれています。善光寺御開帳も7年に1度。

ご住職が2人? 大勧進・大本願と院坊

善光寺は宗派宗門を問わず、また男女の別や身分も問わず、あまねく衆生を照らす寺院として信仰を集めています。ご住職は2人、天台宗大勧進の貫主と浄土宗大本願の上人で、法要などの仏事は大勧進と25院、大本願と14坊によって営まれます。御開帳期間中、最も重要な法要である「中日庭儀大法要」も、4月25日に天台宗、5月9日に浄土宗によって執り行われます。

ご本尊は絶対秘仏

阿弥陀如来を中心に、向かって右に観音菩薩、左に勢至菩薩の三尊が一つの光背の前に立つ姿の仏像。最も古く日本に渡来したと伝えられます。この様式の「善光寺仏」を御本尊とする寺院が全国に点在。「善光寺」と名のつく寺院も全国に100カ寺以上存在しています。



ねじれた柱のひみつ

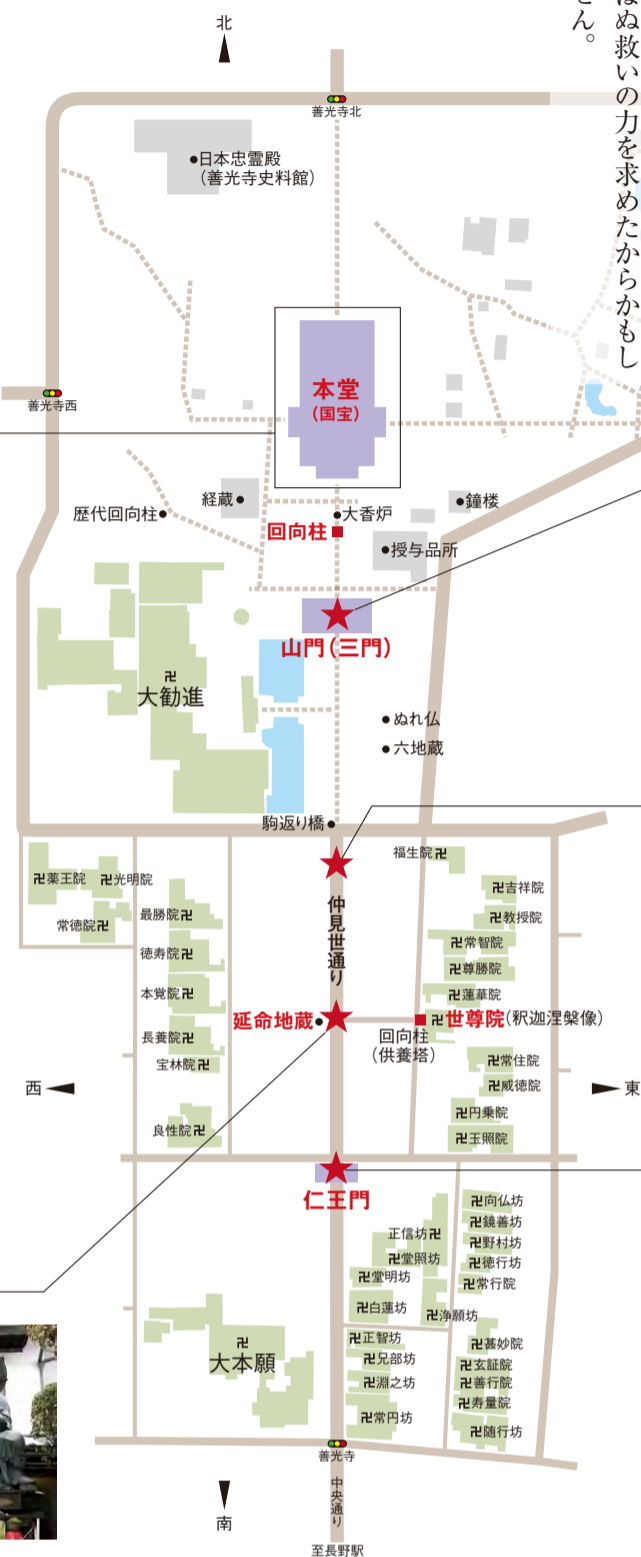
本堂を支える108本の柱の中に、一対ごとに向きがねじれたものが何組も見られます。特に本堂の東に立つ「向拝柱」が顕著です。この柱は1847年の善光寺地震でねじれたと長い間考えられてきました。しかし調査の結果、そうではないことが明らかに。18世紀の建築当時、予定していた木材を火災で失い、十分に乾燥した材を使えなかったことから、いずれ発生する木のねじれを予測して施工したというのが現在の定説。ねじれが生じて上部の梁などに影響をおよぼさないようにしたのです。300年以上前の職人たちが今の状態を想定していたのですね。

延命地藏尊前のパワースポット?

仲見世通りに、かつて善光寺本堂があった場所を示す「如来堂旧地」の碑と延命地藏尊があります(松屋旅館前)。相原さんがこの数年、気になっているのが、その正面に位置する特別な地点の謎。如来堂旧地と釈迦涅槃像のある世尊院を結ぶ線上にあり、善光寺を守護する7つの神社のうちの数社をはじめ、長野市内の歴史ある神社を結ぶ何本もの線がこの地点で交わることを発見しました。公表が待たれる新説です。



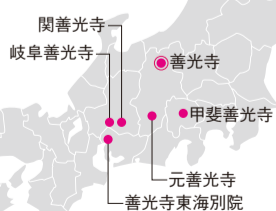
延命地藏尊



7年1度の盛儀 善光寺御開帳が行われます。

全国各地でも善光寺御開帳

信州善光寺と同時期に御開帳を行う善光寺は元善光寺(長野県飯田市)、甲斐善光寺(山梨県甲府市)、善光寺東海別院(愛知県稲沢市)、関善光寺(岐阜県関市)、岐阜善光寺(岐阜県岐阜市)。御利益の旅を計画してみるのも一興ですね。



- 善光寺へのアクセス
- JR・新幹線 長野駅から
 - 善光寺口バスロータリー 1番乗り場から「びんずる号」または善光寺方面行きバス約15分(善光寺大門下車)+本堂まで約5分
 - 徒歩約20分
 - 長野市郊外の臨時駐車場からシャトルバス運行。詳細はインターネット「善光寺御開帳ホームページ」交通情報を参照

善光寺御開帳は、絶対秘仏の御本尊に代わり、同じ姿の「前立本尊」を本堂に遷して供養する特別行事。数え年で7年1度の盛儀で、今年4月5日(日)から5月31日(日)の約2ヶ月間にわたって執り行われます。期間中は、本堂内の前立本尊の手と「善の綱」で結ばれた「回向柱」が本堂前に立てられます。この柱に触れ、本堂で前立本尊を仰ぎ、御本尊と同じ素材(閻浮檀金)できているとされる「御印文」を額に押しつけていただきます(通常は1月7日から15日のみの行事)、そして本堂床下の回廊をめぐって「極楽の錠前」に触れて御利益を願うのが常道。御開帳期間中だけのフルコースです。



御印文頂戴



回向柱



中日庭儀大法要

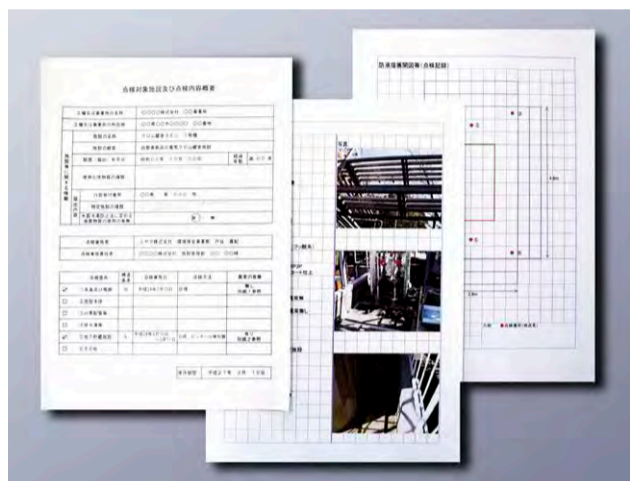
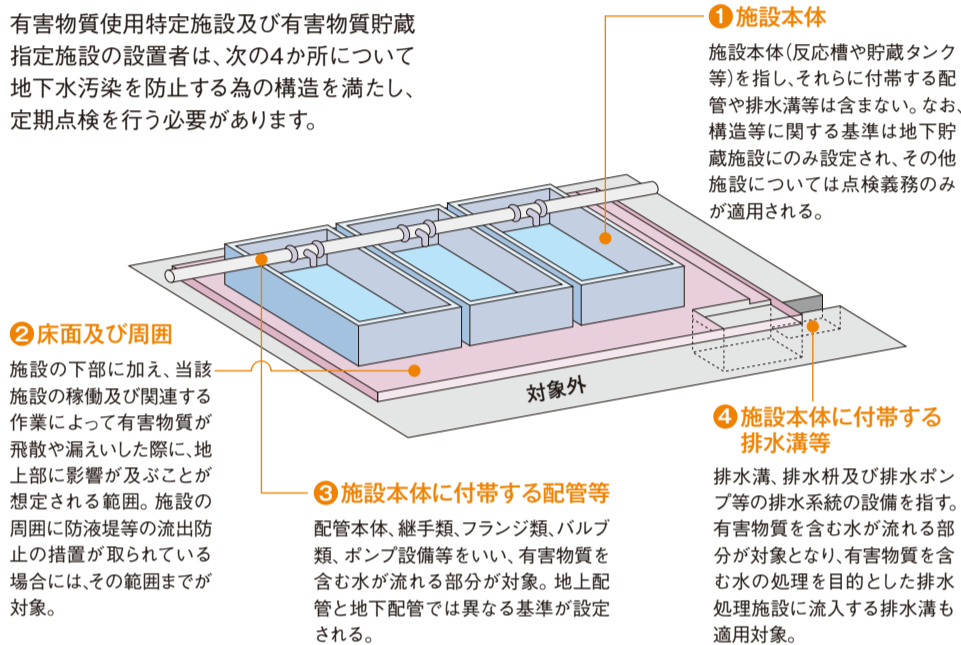
【5月末で猶予期限終了 既存施設も水濁法に基づく規制の対象となります】

平成24年6月施行の改正水質汚濁防止法では、地下水汚染の未然防止を目的として①施設の定期点検及び記録の保管と②構造基準を満たした施設であることの2点が義務化されました。法律施行以前からある既存施設については構造基準への適合が3年間猶予されてきましたが、本年5月末をもってその期間が終了、違反をすれば罰則の対象となります。

ミヤマでは工場の施設診断サービスを通じ、「設備の定期点検」、「構造基準適合可否の診断」、「基準を満たした設備への改修工事」等をご提案しています。詳しくは最寄りの営業所あるいは環境保全事業部までお問い合わせください。

構造基準及び定期点検の適用範囲は4箇所

有害物質使用特定施設及び有害物質貯蔵指定施設の設置者は、次の4か所について地下水汚染を防止する為の構造を満たし、定期点検を行う必要があります。



配管や地下槽など目視困難な箇所も特殊機器で点検(上)、点検後は詳細な報告書を提出(下)。

【脱水汚泥重量を50%削減 乾燥装置ロータリーコイルドライヤー】

フィルタープレス等の脱水機から排出される汚泥を、蒸気過熱したコイル・パドルで破碎しながら過熱。表面積を広げることで、効率的な汚泥の乾燥、減容化を実現します。適用範囲が広く、対象汚泥は有機、無機を問いません。また、連続式やバッチ式、連続2段式など豊富なバリエーションで、対象物の条件に応じた最適な処理が可能です。

